

住宅建築賞

入賞作品

審査委員長 伊東豊雄

委員 伊藤公文、石井和紘、黒川哲郎、坂本一成、
長谷川逸子、三宅理一、山本理顕

住宅建築賞も今年で7回目を迎えた。戦後の日本の建築史を振り返って見ても、常に住宅は若い建築家が自己の思想を語る場であったし、それによって建築の世界に新鮮な刺激を生み出すスパイスのような役割を果たしてきた。

しかし、土地の法外な高騰によって、異常な高級住宅が、異常な程特殊な住まい方によってしか東京周辺の新しい住宅は存在し得なくなっている。東京への通勤可能な地域という応募許容エリアも次第に広がって、かつてのような一般理解としての都市住宅は有り得るのかが問い直される状況である。

ここ数年の応募作からは、そうした厳しさばかりが浮き彫りにされていたのだが、今年はそのような困難を乗り越える力強い提案がいくつかあった。応募点数も昨年の22点から一挙に36点へと増えた。昨年までは正直なところ、入賞5点を選ぶのにさえ汲々としていたが、今年は逆であった。

今年の大きな収穫は、何と言っても集合住宅に二つの力作があった点である。入江経一氏とシーラカンスによるアパートである。いずれも1ユニットがきわめて狭小なほとんど1ルームしかない東京的集合住宅であるが、厳しい条件の下でそれぞれに独特の共有空間を生み出している。入江氏の作品はメタ

リックな素材に美しいカラーを加えて、いかにも都会的な洗練されたファッションブルな感覚でまとめられ、対照的にシーラカンスのものは打放しコンクリートの柱やブレースをあらわにした力強さを表現している。二作ともにそれぞれの個性を十分に発揮して互いの作品を相補し合っており、審査員議論の末、二作ともに特別賞という結果に至った。今後、東京のような過密な都市に於いては、戸建ての住宅の個性的な表現よりも、こうした集合住宅に対するさまざまな提案の方が都市の風景を変化させていく力を期待できるのではないだろうか。

しかし、戸建住宅もなかなかの力作揃いであった。林賢次郎氏の作品は環七通りに面した狭小な土地に美しい光の降る空間をつくり出しているし、安山宣之氏の作品にはいまの若い作家には見られない強引とも思われるエネルギーがこめられている。また、毎回お馴染みのと言っては失礼だが、海野健三氏の直営工事に基づく作品は、以前の技術的考案から一歩踏み出して氏独自の不可思議なイメージの世界の実現に向かい始めている。

来年ももっと多くの方々が新しい提案をして下さって、この賞を盛り上げて下さることを審査員一同心から期待するものです。(審査委員長 伊東 豊雄)

住宅建築賞特別賞

桜台アパート
SELFISH(セルフフィッシュ)

菊池 清美

シーラカンス

建築主 メイセイ一画

施工 河端建設㈱

構造 R/C構造(鉄骨ラーメン構造)(ボイラースラブ)



練馬の桜台駅近くの過密な環境の中に建つR/C5階建の貸店舗付の集合住宅である。設計主旨には「積極的にTOKYOに住む」ことを考えている人に向けてつくったと書かれている。それはTOKYOという環境を延長させることによって既存のコンテクストの中に埋め込もうという思考のレベルの建築を考えているということではなく、この構造化した都市を脱コード化してTOKYOに生きることに向かい合っている新しい都市の建築をつくらうと目論んでいるということだろうと受け取った。今、TOKYOはさまざまな視点でその都市のあり方が注目されていて、建築もまるで都市の実験室のようにつくられている。しかしこの都市は形態や技術レベルの問題ではなく、人が生きていく場所としての新しい提案を必要としている。この建築の施工状態が想像以上によくまとまっていて雑駁を排して考えていたよりすっきりしていたのは意外であり、堅実に取り組んでいることが読み取れた。このグループのますますの活躍を期待してやまない。(長谷川 逸子)

住宅建築賞特別賞

玉川学園の集合住宅

入江 経一

入江一級建築士設計事務所

建築主 積水ハウス㈱

施工 南鴻池組 東京本店

構造 S造+RC造



入江経一氏は、生活行為の根源的な意味を問う事と、生活装置が動く事を関係づけた提案(東京ガス主催「くらしは心のサーカスだ」)で、昨今のエレクトロハウスの安定的近未来志向に、鮮やかに突き刺さって見せてくれた。残念ながら今回の作品では、期待の装置的部分に、彼特有のダイナミズムをもったオブジェ的完成度が希薄であり、また建築的部分ではどこかこたえを感じさせた。しかしキャンピンのような住戸と、出会いの新鮮さを誘うデッキのようなコモンスペースは、だまだま旅をとともにする船客同士のようなさびげない紐帯をつくり出し、他方で、そこにさらけだされた個の孤立的存在をリリカルなものとしている。若きシングルやカップルの「住まう」ことのこだわり、的確に刺さったハウジングといえるであろう。(黒川 哲郎)

住宅建築賞

シェル・シェルター

安山 宣之

安山宣之建築設計事務所

建築主 近藤 保

施工 南タナカホームズ

構造 木造



図面審査の段階で、ほとんどの応募作が過度に抑制の効いた、ローキーなものであったなかで、唯一これだけ(と私には思われた)が、表現に向かう意欲が閉じた枠組のなかにおさまらずに溢れ出し、自壊の一手手前のハイキーな様相すら呈していた点で極端な異彩を放っていた。設計者はもしかしら20代の人ではないかという予想が見事にはずれ、審査員全員が旧知の48歳の安山さんであると知らされた時の驚きは大きかった。その驚きは彼の「若さ」に対するものだったと理解される。この家は、木造HPIシェルの大屋根の下にいくつかの場がゆるやかに仕切られながら展開しているのだが、その内部空間がとても良い。過剰な押しつけがましさを過度の取り澄ましとは無縁の大きな光がある。これもまた今日の住宅設計の状況にあっては特筆すべきユニークさと言えるのではないか。(伊藤 公文)

住宅建築賞

木立の中の家

海野 健三

海野建築家工房

建築主 武 喜久雄

施工 海野建築家工房

構造 木造



海野さんはこの住宅建築賞ですでに常連である。ほとんど毎年入選している。年々応募者の水準が高くなっているこの建築賞で毎年入賞するというのは、これは大変なことのように思えるのだけれども、実はそうじゃない。海野さんが入選するような構図になっているのである。応募者の水準が高いということは、いまの私たちの時代の感性に敏感に反応するような作品が益々多くなっているということである。ところが海野さんの作品は「時代の感性」とは全く無縁である。海野さんの自分の手で作る住宅はその自分の手の限界がそのまま建築の限界である。だから海野さんは自分の手と闘っている。その闘いが固有の建築を生み出しているのである。「時代の感性」に即応しようとする建築の中で、その海野さんの闘いが際立って新鮮に見えるという構図になっているわけである。(山本 理顕)

住宅建築賞

光のシャワー(池田邸)

林 賢次郎

林賢次郎建築設計事務所

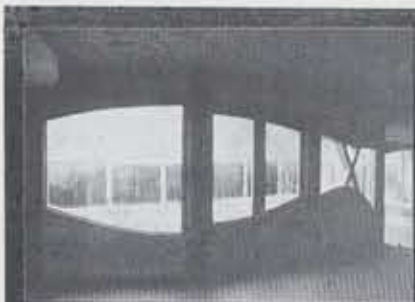
建築主 池田 邦彰

施工 ㈱モジュール技建

構造 RC造



気持ちの良い住宅であった。大きな四角い箱をコンクリートでつくり、その中に吹抜をいろいろに組み合わせて一体の空間をつくらせている。住宅としては恵まれたゆたかりた広がりがある。こうした試みで意図が通った場合に起る無理な感じがない。作者はこうした比較的まとめやすい建築をじっくりと幾つかつづけて、それでなりわいとしてもやっていけているようで、ある余裕すら感じる時代性がある。交通音の激しい環境7号沿いにあるということや、こういうタテ方向に抜ける窓状の住居という私たち東洋の古典的名作の自覚を想起する。しかしそういう迫力は求められていない。ここではむしろ空間以外のテーマを喪失してしまっただけに、軽さを身につけた。という感がある。(石井 和雄)



断面図



西立面図



南立面図



1 階平面図



2 階平面図



0 5 10 15 m
Scale / 1 : 200

